研究論文

棲霞山石窟南朝如来像の着衣形式について

《キーワード》棲霞山石窟　南朝如来像　着衣形式

陳　悦新
田林　啓　訳

はじめに

棲霞山石窟は明代南京城の東北約二十二キロメートルに位置する。南京は漢代には秣陵県とされ、孫権はこれを建業と改めた。西晋太康三年（二八二）には、秣陵の河の北を分けて建業とし、愍帝が即位すると、帝諱を避けて建康とした。[1] 孫権が都と定めてから陳の滅亡に至るまでに、南京は六つの王朝の都となり、南朝の政治、経済、文化の中心であった。

棲霞山石窟の窟龕造像区域は、南から北に三つに分けられ、それぞれ千仏岩区、紗帽峰区及び千仏嶺と称される。その中でも、千仏岩は南朝窟が主であり、また唐代の窟も持ち、その造像の保存状態は良好であるが、残りの二区は唐代窟が主要をなし、造像も多くの風化を被っている。

陳江総「摂山棲霞寺碑」[2]と唐高宗「摂山棲霞寺明征君之碑」[3]の記載に依ると、棲霞山の開龕や造像は南斉の高士の明僧紹と法度禅師によって始められ、南斉皇室や貴族の子弟がそれに助力し、梁代に装飾が加えられたとのことである。石窟開鑿の時期はおよそ永明二年（四八四）以後、建武四年（四九七）或いは永元二年（五〇〇）より前、即ち五世紀末期である。[4] 隋唐五代では引き続き造営が行なわれ、宋元及び明初の低迷期を経て、明半ばから民国の時期には再度仏事活動が盛行し、石窟の多くに補修が加えられた。[5]

千仏岩区の窟番号は全てで二九まであるが、南朝窟は十五個あり、そのうち、第五窟、第一〇窟、第一二窟、第一三窟、第一五窟は西面に位置し、第一八～二六窟、第二八窟は南面にある。一九二〇年代に棲霞寺の僧は補修の際に、それらの造像にセメントを塗ったため、元来の様子は窺えなくなってしまった。その後、一部の造像のセメントは剥がされ、本来の衣の様子を見ることができるようになった。第一八窟、第一九窟、第二二窟、第二四窟、第二六窟、第

二八窟の六つの窟に関しては、仏衣の保存状態は比較的良好である。しかし、第一九窟の造像以外は、全て頭部が存在しない。[6]

さて、如来像の着衣形式の分類と名称はおおよそ以下のようなものである。

如来像の着衣は全てで三枚の長方形の衣からなる。即ち、内側（第一衣）の下衣（経文意訳）（安陀会（経文音訳））、中層（第二衣）の中衣（経文意訳）（鬱多羅僧（経文音訳））、外層（第三衣）の上衣（経文意訳）（僧伽梨（経文音訳））である。また内側の上半身には肌着の僧祇支も着ける。僧祇支以外の三枚の衣の関係について、層を成す部分に着目すると、インドと中国の如来像の着衣形式は甲乙の二つに大別でき、それは上衣が外側を全て覆うもの（上衣外覆類）と中衣が露出しているもの（中衣外露類）である。前者は僅かに上衣を着けるという様子を表現するのみであるが、後者は上衣だけでなく中衣も着ける様子まで表現しているのである。次に、「上衣外覆類」は上衣の着け方の違いから、胸元を開けない通肩形式（通肩式）、胸元をU字型に開ける通肩形式（露胸通肩式）、偏袒右肩式、偏袒右肩と同様の着衣法ではあるが右胸を出すのみで右肩には衣が残る形式（覆肩偏袒右胸式）、右腕側の衣の末端を左腕側にもっていき左肘に懸ける形式（搭肘式）などに分類できる。そして、「中衣外露類」は上衣及び中衣の着け方の違いから、右腕側の上衣の末端を左腕側にもっていき左肘に掛ける形式（上衣搭肘式）、上衣を複数枚纏う形式（上衣重層式）、中衣の末端が肘に掛かる形式（中衣搭肘式）などに分類できる。[7] インドでは上衣外覆類の通肩式と偏袒右肩式があるのみであるが、中国では以上の八種の着衣形式がある。

そして棲霞山石窟南朝如来像では、「上衣外覆類」中の露胸通肩式と通肩式、そして「中衣外露類」中の上衣搭肘式と中衣搭肘式の四種が見られる。

一、棲霞山南朝如来像着衣形式

甲：「上衣外覆類」

①露胸通肩式

上衣が身体の後ろから両肩を覆った後に、その右腕側の衣端が腹前を通って左肩に掛かり、頸下で衣の縁がU字型を呈して垂下する。第一九窟、第二二窟、第二四窟、第一八窟の如来像の着衣形式（図一-1～4）がそれに当たる。またこれらの衣の下端は台坐前面を覆い、第二二窟、第一八窟の場合は上半身の内側に僧祇支が見える。第一九窟の如来像の胸部は後世の重修によるもので、また第二四窟像の胸部は破損しているため、その衣の様子は不鮮明である。

②通肩式

上衣が身体の後ろから両肩を覆い、その右腕側の衣端が頸前を通り、左肩に掛かる形式。第二六窟如来像の着衣形式のようなものであり（図二）、この像の衣の下端も台坐の前面を覆う。

乙：「中衣外露類」

③上衣搭肘式

上衣が身体の後ろから両肩を覆い、その右腕側の衣端が右腋の下

を通って、左肘に掛かる。中衣は依然として露胸通肩式に着けられる。第二四窟如来像の如きものであり（図三）、この像でもやはり衣の下端は台坐の前面に掛かり、また上半身内側には僧祇支も着ける。

④中衣搭肘式

中衣が身体の後ろから両肩を覆い、右腕側の衣が直接右肘に掛かって垂下し、胸前ではまた中衣と繋がる帯が垂れている。第一八窟、第二八窟如来像のもの（図四-1、2）がそれに当たり、これらの像も上半身内側に僧祇支を着ける。第一八窟像は胸部以上の部分が破損しているが、中衣との境目にはなお僧祇支の斜線を認めることができ、衣の下端は台坐の前面を覆い、上衣は僅かに腹前を通り左肘に掛かる部分のみ見ることができる。[8] 第二八窟像の衣の下端は短く、台坐上に平坦に置かれている。この像の上衣は身体の後ろから両肩を覆い、その右腕側の衣端は左肘に掛かるようになっている。

文献の記載と考古学的分類から、以上の六つの窟の開鑿時期は次のように考察できる。

第一九窟は棲霞山南朝窟中で最も開鑿時期が早く、かつ最大の窟である。前述した陳江総「摂山棲霞寺碑」と唐高宗「摂山棲霞寺明征君之碑」では、明僧紹は「有懐創造」、「将于岩壁造第尊儀，乃眷為山，未遑初簀」と記録され、永明二年（四八四）に卒したとある。その後、僧紹の子の臨沂令仲璋と法度禅師が無量寿仏と二菩薩の龕を開き、南斉の文恵太子及び豫章、竟陵、始安の諸王が「各舎泉貝」、「光隆慧業」として窟造営に貢献したという。碑には無量寿仏は「坐高三丈一尺五寸」であると記され、梁代の一尺はおよそ二十三・二六センチメートルであり、[9] これによって換算すると「三丈一尺五寸」は七三三センチメートルとなる。第一九窟の大仏は実測すると七九〇センチメートルあり、碑の無量寿仏の法量とほぼ一致する。

今世紀初めに第一九窟において考古学的調査が行なわれたが、その際に陳江総「摂山棲霞寺碑文并銘」の残部[10]が出土した。この碑陰には、無量寿仏[11]、王奐造像[12]、明仲璋造像、東第三龕等と順に記されている。大仏及びそれ以東の諸窟は現在第一九窟、第二〇窟、第二二窟、第二四窟と編号されているが、そのうち第一九窟が恐らく「無量寿仏」龕であろう。第二〇窟の主尊は上半身が欠損しており、僅かに腿部以下が存在するのみである。壁面に残っている頭光の中間から下の高さに腿部以下の残存部分の高さを加えると、像は本来およそ二〇三センチメートルあったことが分かり、碑に記される「坐高八尺九寸（約二〇七センチメートル）」とほぼ一致し、王奐の造像は第二〇窟本尊であるように思われる。第二二窟は第一九窟から東側に二番目の窟である。碑陰には無量寿仏、そして斉雍州刺史王奐が巴陵王のために造像するという記載に続けて「（上欠）沂令明仲璋造」とある。この明仲璋とは、正に法度禅師と共に無量寿仏並びに二菩薩龕を開鑿した千仏岩の創始者である臨沂令明仲璋のことである。第二二窟とこの記載との関係が疑われる。

第二四窟は第一九窟より東側に三番目の窟であり、窟内の正壁、左右壁いずれにも一仏が彫られる。この三体の如来像は非常に大き

表一　棲霞山南朝窟如来像着衣形式と制作時期

制作時期	窟番号	着衣形式			
		上衣外覆類		中衣外露類	
		露胸通肩式	通肩式	上衣搭肘式	中衣搭肘式
南斉	19	▲			
	22	▲			
	24	▲		▲	
南斉・梁の移行期	18	▲			▲
	26		▲		
梁	28				▲

く、正壁主尊を例に取ってみると、頭光の中間部から下、そして残っている部分の高さを総合すると、元の像高は約一六四センチメートルとなる。この法量は、碑に記される「坐高七尺九寸（約一八四センチメートル）」に近く、「東第三龕」は或いは第二四窟ではないかと推測される。また、窟構造、造像内容、造像の組み合わせ等から総合的に分析すると、第一九窟、第二二窟、第二四窟は類似しており、ほぼ同時期、即ち永明二年（四八四）以降の五世紀末期に開鑿されたものと考えられる。[13]

第一八窟は第一九窟の西側に位置する。この窟は千仏岩中で唯一の二仏並坐像を造り、頭光の中間より下の高さ及び残存部の高さから二仏の像高は当初約一三五センチメートルあったことが分かり、碑に記される「二像、坐身並高五尺四寸（約一二六センチメートル）」という法量に近い。第二六窟は第二四窟よりも東側にあり、開鑿時期は第二四窟に次ぐと思われる。第一八窟、第二六窟を窟構造、如来像の着衣形式等において第一九窟、第二二窟、第二四窟と比較すると、既に変化が見られ、それらの開鑿時期はおおよそ南斉から梁への移行期と推定される。

第二八窟は梁中大通二年（五三〇）という千仏岩中唯一のはっきりとした紀年を持つ南朝窟である。

ここで棲霞山南朝如来像の着衣形式と造窟時期の関係を表一に示す。

表一から棲霞山南朝如来像着衣形式は三つの発展時期を持つことが知られ、南斉時期には露胸通肩式が流行すると共に上衣搭肘式が出現し、斉・梁の移行期には南斉の露胸通肩式が引き続き行われ、また通肩式と中衣搭肘式が出現してくる。梁代には斉・梁の移行期に出現した中衣搭肘式が見られると同時に、その最も大きな変化として衣の下端が寛く台坐を覆うことは無くなり、短く台上にのるということが指摘される（図四-2）。

およそ南斉武帝の永明年間（四八三～四九三）の末から建武年間（四九四～四九八）の初めまで開鑿が行なわれた浙江省新昌宝相寺西北の千仏院大小岩洞中[14]の造像（図五-1）及び成都万仏寺梁中大通元年（五二九）の道猷母子造像[15]（図五-2）は露胸通肩式に衣を着ける。現在上海博物館に所蔵され、蜀の地（現四川省成都地区）から伝わった梁中大同元年[16]（五四六）の慧影造像[17]は上衣搭肘式に衣を着ける（図五-3）。これらの造像は、大体において棲霞山如来像の着衣形式が南朝域内で流行していた状況を反映している。

二、棲霞山南朝如来像着衣の源流

(1) 棲霞山南朝如来像着衣形式の源泉

棲霞山石窟如来像の露胸通肩式と通肩式の着衣は、三国・呉から西晋に至る時期の長江下流域の副葬品（神亭壺）に貼り付けられる如来像[18]の通肩式の着衣（図六-1、2）と淵源関係にある可能性がある。これらの如来像の衣の下端は座前を覆うが、こうした形式はインドでは珍しいものである。『宋書』巻九十三「戴顒伝」には、

自漢世始有仏像，形制未工，（戴）逵特善其事，（戴）顒亦参焉。宋世子鋳丈六銅像于瓦棺寺，既成，面恨瘦，工人不能治，乃迎顒見之。顒曰，非面瘦，乃臂胛肥耳。既錯減臂胛，瘦患即除，無不嘆服焉。[19]

とあり、このことから三国・呉から西晋時期の頃には漢の地で制作された仏像には、既に漢文化への理解と認識が浸透していたようであると考えられる。インド如来像とは異なり衣下端が座前を覆うことや頸下の衣の縁をU字型に処理することは、恐らくこのような状況を具体的に反映したものであろうと思われる。

また、こうした文化的要素以外にも自然的要素も如来像の衣の変化に重要な作用を及ぼした可能性がある。漢の地は気候が寒冷で、インドとは大きく異なり、如来像着衣の下端が座前を覆うのも或いは防寒ということが背景にあったのではないだろうか。経典では、三枚の衣の中で上衣が最大で、中衣がそれに次ぎ、下衣が最小であると規定されている。[20]下衣は最小であると雖も、腰以下の部分を覆うために、下端は最も長くなる。中衣は身体全体を覆い、上衣と同じ着け方をするために、上衣に全体が覆われてしまい、その結果インドの如来像の衣の下端は僅かに二層のみになってしまうのである。棲霞山石窟如来像の衣の下端は三層となり、中衣が外に見えるようになっており、三枚の衣の全体の厚みがはっきり示されている。着衣の実用的機能を表した可能性がある。

棲霞山石窟の上衣搭肘式の源泉については、未だにはっきりと言うことはできない。炳霊寺石窟第一六九窟西秦建弘元年（四二〇）第六号龕塑像[21]の衣（図六-3）や北涼石塔縁禾三年（四三四）白双且塔[22]の仏像の衣などは上衣外覆類の搭肘式であり、上衣は身体の後ろから両肩を覆い、右腕側の衣端は右腋下を通って左肘に掛かるようになっている。その上衣の様子と棲霞山第二四窟如来像の上衣搭肘式（図三）は類似し、両者の上衣の着衣形式は同一の源泉からの影響を受けたようである。この源泉は前秦・後秦時期の長安地域に求められる可能性がある。

その時期の長安は中国仏教の中心地であり、その仏教の影響は南北に遍く及んだ。前秦・後秦時期に高僧道安は長安に七年間（三七九～三八五）滞在し、鳩摩羅什は十三年間（四〇一～四一三）いた。彼らは訳経に励み、義学沙門が集い、長安の仏教は興隆した。[23]北魏文成帝の皇后馮氏の本籍は長楽信都であり、その父の馮朗は北燕滅亡前に北魏に入り、秦雍の二州の刺史に任ぜられ、長安に於いて馮氏とその兄の馮熙をもうけた。馮氏は仏教を信奉しており、「立文宣王廟于長安，又立思燕仏図于龍城」という事績があり、馮熙もまた、

信仏法，自出家財，在諸州鎮建仏図精舎，合七十二処，写十六部一切経，延致名徳沙門日与講論，精勤不倦。

というように熱心な仏教信者として記録される。[24] 弘治十五年（四一三）に羅什が長安で卒した四年後（四一七）、この地は劉裕に攻略され、またその明くる年（四一八）には赫連勃勃に攻め落とされることとなる。この前後には、また西秦と北魏の争乱もあり、長安では兵禍が頻繁に起こり、名僧は四散し、その中で江淮に南下するものもいた。[25] 以上の歴史背景によって、長安が涼州と建康に影響を与えた源とすることも或いは理にかなっているではないだろうか。

(2) 棲霞山南朝如来像着衣形式の北朝における流行

「正朔所在」[26]としてみられた南朝は、建康を中心に、その伝統文化の北朝に与える影響も大きかった。およそ北魏洛陽遷都から隋建立まで（四九四～五八一）の比較的長い時期に、南朝如来像の着衣形式は直接的或いは間接的に青徐地域（現山東省）、晋冀地域（現山西省、河北省）と甘寧地域（現甘粛省、寧夏回族自治区）に伝わり、広く流行したようである。

①青徐地域

青徐地域は露胸通肩式を如来像着衣形式の中で主なものとする。青徐地域のこの着衣形式を採る最も早期の作例は、青州龍興寺出土の北魏永安三年（五三〇）賈淑姿造像（図七-1）である。東魏、北斉では青州（図七-2）、諸城等の地で普及しており、その例として諸城の東魏武定三年（五四五）銘士継叔造像や北斉天保三年（五五二）銘僧済本造像が挙げられる。[27] 隋代に至っても依然としてこの着衣形式が多いのは、雲門山第一龕の造像等[28]（図七-3）の如くである。

西晋滅亡後、青州はいくつかの争乱を経る事になり、後趙、前燕、前秦、南燕と言った政権の統治を受ける。東晋義熙六年（四一〇）に劉裕が南燕を滅ぼし、青州は東晋及び劉宋（南朝宋）の統治下に入り、続いて北魏皇興三年（四六九）には北魏によって支配される。青州と徐州に関連する事実として、西晋太康十年（二八九）に青州城陽郡の莒、姑幕、諸、東武の四県は東莞郡に属すことになり、徐州の管轄下に入るようになったことが挙げられる。[29] 東武は現在の諸城である。北魏天安元年（四六六）に、徐州は北魏の支配下に入る。

青徐地域は十六国と北魏時期に半世紀以上も南朝の支配下にあり、南朝文化の基礎を具有していた。陸路或いは海路は共に江南に通じ、[30] 江南との文化交流は盛んに行われており、また棲霞山石窟創始者の明僧紹は斉郡平原の人であった。[31] 更に劉宋の勅により長江を渡り、度々師と仰がれた高僧釈法申も代々青州に居した家の出であり、[32] 斉竟陵王の激賞を受けたという高僧釈宝亮は徐州東莞の貴族出身であったのである。[33] この他、南朝は義学を重んじ、江南では観音応験の思想が流行し、多くの銅木に造像するという風習があったが、青州でもまたこの尊崇の習慣を受容していた。[34] 青州地区北朝墓葬中に現れる南朝絵画の特徴もまた両地域の密接な関係を示す根拠となる。[35]

②晋冀地域

晋冀地域の着衣形式は中衣搭肘式、上衣搭肘式、通肩式の三種が主なものである。

中衣搭肘式を採る造像の最も早い実例として雲岡第三期（約四九四～五二四）[36]に見られ、例えば第五窟外側右側に彫られる第五-一一窟[37]のものが挙げられる（図八-1）。

上衣搭肘式は東魏天龍山石窟第三窟造像[38]のもの（図八-2）があり、ここでは中衣はなお露胸通肩式としている。

通肩式は、東魏、北斉の北響堂山石窟北洞、中洞の造像[39]において採られ（図八-3）、并せて衣の下端の形は棲霞山石窟梁時期の第二八窟造像（図四-2）の特徴を吸収しており、台坐を覆うようにはならず、平たく坐上に置かれる。

太和一八年（四九四）、孝文帝は洛陽に都を遷したが、その時点で平城はすぐには荒廃せず、少なくとも熙平年間（五一六～五一八）までは旧都の様を維持していた[40]。当時の北魏に奔った南朝の貴族、豪族或いは南斉仏教の北魏への作用に関連して、前述の「摂山棲霞寺碑」中の雍州刺史王奐の子の王肅が太和十七年（四九三）に北魏へ奔ったというような事実があるが[41]、彼は孝文帝の大歓待を受け[42]、南朝前期文化の北魏に対する影響は「其関鍵実在王肅之北奔」とまで言われた。王肅の家は代々仏教を信仰しており、父の王奐は棲霞山において巴陵王のために造像し、兵が攻め入ってくる直前にも仏を拝んでおり、「奐聞兵入，還内礼仏，未及起，軍人遂斬之」[43]と記録される。王肅の妻の謝氏は出家し、尼僧となり、肅は洛陽城の南に彼女のために「造正覚寺以憩之」という。王肅の甥の王翊は洛陽城内の自宅を捨して願会寺を建てている[44]。

永熙三年（五三四）に北魏は滅亡し、東魏・西魏に分裂した。東魏とそれに続く北斉は鄴城（現河北省臨漳県）に都を定め、またそれと同時に晋陽（現山西省太原市）を政治・軍事的に重要な地とし[45]、東魏・北斉のもう一つの政治文化の中心とした。東魏・北斉と南朝は交流を保ち[46]、北朝の高僧は南朝を遊学し、帰ってくると帝王から誉れを受けた。その例として雁門（現山西省代県）の釈曇鸞は梁朝に赴いた後に「魏主重之，号為神鸞焉」とされ、また上谷（現河北省懐来県）の釈僧達は梁武帝の時に長江を渡り、同泰寺に住し、北朝に帰ってから「斉文宣特加殊礼」[47]と記録される。こうしたことから北朝の南朝文化に対する尊崇の様子が窺える。

③甘寧地域

甘寧地域では露胸通肩式、通肩式の二種が主なものであった。

露胸通肩式は西魏では大統四年（五三八）、五年（五三九）の紀年を持つ莫高窟第二八五窟（図九-1）、須弥山石窟第三二窟（図九-2）にあり、北周では麦積山石窟[48]（図九-3）、須弥山石窟（図九-4）、莫高窟（図九-5）[49]において比較的盛行した。

通肩式は主に北周の麦積山石窟（図九-6）、莫高窟（図九-7）の造像及び武山拉稍寺石窟明帝三年（五五九）[50]大仏（図九-8）等にみられる。

西魏朝は廃帝二年（五五三）に成都を占領し、恭帝元年（五五四）には江陵を平定し、南朝仏教からの影響をより強く受けるようになった。これに関して「逮太祖平梁荊後，益州大徳五十余人，各懐経部送像至京」[51]という記録がある。高僧の釈亡名、釈慧善は梁朝で名を馳せていたが、江陵平定後に西魏に入り、宇文護の崇信を受けた[52]。嘗て揚都（建康）で講学した釈僧瑋は北周帝王の「遵賢持徳，

下車問道，召至京師，親奉清海」という礼遇を受けた。[53] 南朝仏教は甘寧地域で広く流行し、概ね南朝の庾信、王褒等の江左（江南地区）の文人が関中に入った頃より、関中は文化に関して全面的に南朝の形勢を模倣し、[54] 呼応するようになった。

《筆者付記》

本稿は、「国家文物局文化遺産保護科学和技術」の研究課題「五至八世紀漢地仏像服飾研究」（編号 2009028-15/08）の成果の一部である。資料収集に当たって、南京市博物館の多大なる協力を得た。記して謝意を表する。

《訳者付記》

本稿は『華夏考古』二〇一〇年第二期掲載の「棲霞山南朝仏衣類型」の日本語訳文である。またこの翻訳は、平成二十二年科学研究費補助金（特別研究員奨励金）による研究に関連する成果の一部である。

註

（1）『宋書』巻三十五、州郡志（中華書局、一九七四年）一〇二九～一〇三〇頁。

（2）葛寅亮『金陵梵刹志』（何孝栄校点本、天津人民出版社、二〇〇七年）一八〇～一八三頁。

（3）注2文献、二二〇～二二四頁。

（4）宿白「南朝龕像遺迹初探」（『中国石窟寺研究』文物出版社、一九九六年、初出：『考古学報』一九八九年第四期）一七六～一七九頁。

（5）南京市博物館『棲霞山石窟考古報告』（文物出版社、未刊）。

（6）以上南朝窟に関しては註5参照。

（7）陳悦新「仏衣与僧衣概念考弁」（『故宮博物院院刊』二〇〇九年第二期）。

（8）この像の状況は比較的複雑である。一九二〇年代に大規模なセメントによる修復が行なわれ、九〇年代末にセメントが剥がされ、石質表面が露出した。胸以上の部分の石質はやや異なり、胸及び腹部とのつながりが連続しておらず、後補のものに違いない。但し、後補のものとは言え、彫法技術は比較的精緻であり、これの衣文線と元の部分の接合部もまた自然であり、上半身の内側には交領の衣を着けているが、その左襟と後補でない元の部分の僧祇支はきれいに繋がっているのである。現在の造像は後補の部分に従って胸以上の部分とその下の部分が繋げられ、全身に薄くセメントが塗られており、内側には交領の衣を着けているようである。誤解を避けるために、線描図では点線によって後補部分を示しておいた。この像の上衣の着衣形式は、左側が未だに表現されず、右側は右肩を衣が覆った後に、その衣の端が腹前を通って左肘に掛かっていたと推測される。

（9）盧嘉錫総主編『中国科学技術史―度量衡巻』（科学出版社、二〇〇三年）二八三頁。

（10）陳江総「摂山棲霞寺碑文并銘」の残部碑陰には「（上部欠損）身坐高三丈一尺五寸，通坐高四丈，含髻頭長八尺五寸，（上部欠損）手長六尺九寸，両膝相去二丈五寸，并二菩薩高三丈（下部欠損），（上部欠損）造，斉文恵太子随喜　斉豫章王随喜　斉竟陵文宣（下部欠損）。…（上部欠損）像身坐高八尺九寸　斉雍州刺史王奐為巴陵王造（下部欠損）。（上部欠損）沂令明仲璋造東第三龕像身坐高七尺九寸（下部欠損）。…（上部欠損）衛迦葉龕二像坐身并高五尺四寸　梁東陽州刺史番禺（下部欠損）」（註5参照）。

（11）陳江総「摂山棲霞寺碑」には「仲璋…与度禅師鐫造無量寿仏，坐身三丈一尺五寸，通座四丈，并二菩薩，倚高三丈三寸。」（註2参照）。このため、新出土碑陰の文字の一番目の像は無量寿仏であることが分かる。

（12）陳江総撰の「摂山棲霞寺碑文并銘」碑陰には「像身坐高八尺九寸，斉雍州刺史王奐為巴陵王造」として雍州刺史は「王奐」であるとしている（註5参照）。葛寅亮『金陵梵刹志』巻四（註2参照）及び厳観『江寧金石記』巻一（嘉慶

九年刻本）所収のこの碑では全て「王奐」を「田奐」と誤って記している。

(13) 林蔚「棲霞山千仏岩区南朝石窟的分期研究」（『燕京学報』二〇〇五年新十九期）。

(14) 宿白「南朝龕像遺迹初探」（『中国石窟寺研究』文物出版社、一九九六年、初出：『考古学報』一九八九年第四期）一八五頁。

(15) 高文、高成剛『四川歴代碑刻』（四川大学出版社、一九九〇年）八十五頁。

(16) 葉昌熾撰、柯昌泗評『語石　語石異同評』（中華書局、二〇〇五年）三一二頁。

(17) 丁文光「梁中大同元年造釈迦石像」（『文物』一九六一年第十二期）。

(18) 宿白「四川銭樹和長江中下遊部分器物上的仏像—中国南方発現的早期仏像札記」（『文物』二〇〇四年第十期）。

(19) a. 註1文献巻九十三、戴顒伝、二二七七～二二七八頁。

b. また張彦遠『歴代名画記』巻五、晋（兪剣華注釈本、上海人民美術出版社、一九六四年）一二三頁の「（戴）逵既巧思，又善鋳仏像及彫刻，曾造無量寿木像，高丈六，并菩薩。逵以古制朴拙，至于開敬，不足動心，乃潜坐帷中，密听衆論。所听褒貶，輒加詳研，積思三年，刻像乃成」参照。

(20) 『十誦律』巻五、明三十尼耆法（『大正蔵』第二十三冊）三十頁c～三十一頁aに「用作僧伽梨最下九条，成分別若干長若干短，総説九条。…用作欝多羅僧七条，成分別若干長若干短，総説七条。…用作安陀衛五条，成分別若干長若干短，総説五条。」とある。

(21) 旧編号では第六龕である。ここでは常青の新編号を採る。常青「炳霊寺一六九窟塑像与壁画的年代」（北京大学考古系『考古学研究（一）』文物出版社、一九九二年）四二二頁。この像の右側の衣の淵は欠損している。

(22) 張宝璽『甘粛仏教石刻造像』（甘粛人民美術出版社、二〇〇一年）五十五頁、図版二十六。

(23) 湯用彤『漢魏両晋南北朝仏教史』（中華書局、一九六三年）二一九～二二七頁、二九〇～二九六頁。

(24) 以上の記載の出典はそれぞれ次の通り。

a. 『魏書』巻九十七、島夷馮跋伝附弟文通伝（中華書局、一九七四年）二一二六～二一二九頁。

b. 『北史』巻十三、文成文明皇后馮氏伝及び巻八十馮熙伝（中華書局、一九七四年）四九五～四九六頁及び二六七六～二六七七頁。

(25) 註23書籍二七八～三四〇頁。

(26) a. 『北斉書』巻二十四、杜弼伝（中華書局、一九七二年）三四七頁に「（斉神武曰）江東復有一呉老翁蕭衍，専事衣冠礼楽，中原士大夫望之，以為正朔所在。」とある。

b. 『続高僧伝』巻六、魏洛下広徳寺釈法貞伝（『大正蔵』第五十冊）四七四頁bに「（法貞）曰，大梁正朝礼儀之国，又有菩薩応行風教，宣流道法。」とある。

(27) a. 杜在忠、韓崗「山東諸城仏教石造像」（『考古学報』一九九四年第二期）図版拾二、拾壱一。

b. 青州市博物館『青州龍興寺仏教造像芸術』（山東美術出版社、二〇〇三年）の東魏、北斉に関する図版参照。

(28) 雲門山一龕はおよそ開皇十年（五九〇）以前に開鑿された。閻文儒『中国石窟芸術総論』（天津古籍出版社、一九八七年）三十九頁。

(29) 『晋書』巻十五、地理志下（中華書局、一九七四年）四四九～四五二頁。

(30) 法顕は獅子国から海上ルートで広州に向かったが、その途中で嵐に遇い青州長広郡に漂着した。その後、船商人に随って青州からまた揚州に向かったが、この時もまた海上ルートで揚州に南航した可能性がある。これは青州が海上ルートによって東南地域と相通じていたことを反映している。張巽『法顕伝校注』（上海古籍出版社、一九八五年）一六七～一七六頁。

(31) 『南斉書』巻五十四、高逸・明僧紹伝（中華書局、一九七二年）九二七～九二八頁。

(32) 註26b文献巻五、梁揚都安岳寺沙門釈法申伝、四六〇頁a。

(33) 『高僧伝』巻八、梁京師霊味寺釈宝亮伝（湯用彤校注本、中華書局、一九九二年）三三七～三三八頁。

(34) 宿白「青州龍興寺窖蔵所出仏像的幾個問題—青州城与龍興寺之三」（『文物』一九九九年第十期）。

(35) 楊泓「山東青州北朝石仏像総論」(『漢唐美術考古和仏教芸術』科学出版社、二〇〇〇年、初出：『中国仏学』一九九九年秋季号)三二〇頁。

(36) 宿白「雲岡石窟分期試論」(『中国石窟寺研究』文物出版社、一九九六年、初出：『考古学報』一九八九年第四期)八十四～八十八頁。

(37) 李雪芹「雲岡石窟新編窟号説明」、「関于雲岡石窟新編窟号的補充説明」(雲岡石窟文物研究所『雲岡石窟百年論文選集』第二巻、文物出版社、二〇〇五年)一四四～一四九頁、一九一～一九四頁。

(38) 李裕群『北朝晩期石窟寺研究』(文物出版社、二〇〇三年)五十七～八十六頁参照。

(39) 註38書籍八～五十六頁。

(40) 宿白「平城実力的集聚和「雲岡様式」的形成与発展」(『中国石窟寺研究』文物出版社、一九九六年、初出：『中国石窟・雲岡石窟』第一巻、文物出版社、一九九一年)一三九～一四一頁。

(41) a. 註24a文献巻六十三、王肅伝、一四〇七頁。

b. 『資治通鑑』(中華書局、一九五六年)四三二八頁。

以上両書では太和十七年のこととなっている。

c. 『洛陽伽藍記』(周祖謨校釈本、科学出版社、一九五八年)一二三頁、ここでは太和十八年となっている。

(42) 陳寅恪『隋唐制度淵源略論稿　唐代政治史述論稿』(三聯書店、二〇〇一年)十三頁。

(43) 『南斉書』巻四十九、王奐伝(中華書局、一九七二年)八五〇頁。

(44) 註41c文献二十九、六十三頁。王翊については註24a文献巻六十三、王肅伝附子翊伝、一四一三頁。

(45) 註24b文献巻六、斉本紀、二一七、二二四頁「神武以晋陽四塞，乃建大丞相府而定居焉。…自是軍国政務，皆帰相府。」。

(46) 註24b文献巻五、魏本紀、一八七～一九四頁及び巻七、八、斉本紀、二四八～二九四頁。

(47) 註26b文献巻六、魏西河石壁古玄中寺釈曇鸞伝及び巻十六、斉林慮山洪谷寺釈僧達伝、四七〇頁a～四七〇頁c、五五二頁c～五五三頁b。

(48) 「露胸通肩式」の甘寧地域での最も早い例は、麦積山石窟北魏第一七窟、第一四二窟左壁のものであるが、北魏期ではこの種の着衣形式は珍しいものであり、北周期になると麦積山で流行した。麦積山石窟北魏窟と南朝棲霞山石窟間の問題については、今後の更なる研究が待たれる。

(49) 註38書籍八十七～一七六頁。

(50) 摩崖三尊像の左側菩薩下方の題記には「維大周明皇帝三年歳次己卯二月十四日，使持節柱国大将軍隴右大都督秦、渭、河、鄯、涼、甘、瓜、成、武、岷、洮、鄧、文、康十四州諸軍事秦州刺史蜀国公尉遅迥，与比丘釈道蔵于渭州仙崖敬造釈迦牟尼造一軀，願天下和平、四海安楽，衆生与天地久長，周祚与日月俱永」(李裕群『古代石窟』(文物出版社、二〇〇三年)一二〇頁)。

(51) 註26b文献巻十六、周京師大追遠寺釈僧実伝、五五八頁a。

(52) 註26b文献巻七、周渭濱沙門釈亡名伝、及び巻八、周長安崇華寺釈慧善伝、四八一頁b～四八一頁c、四八六頁b。

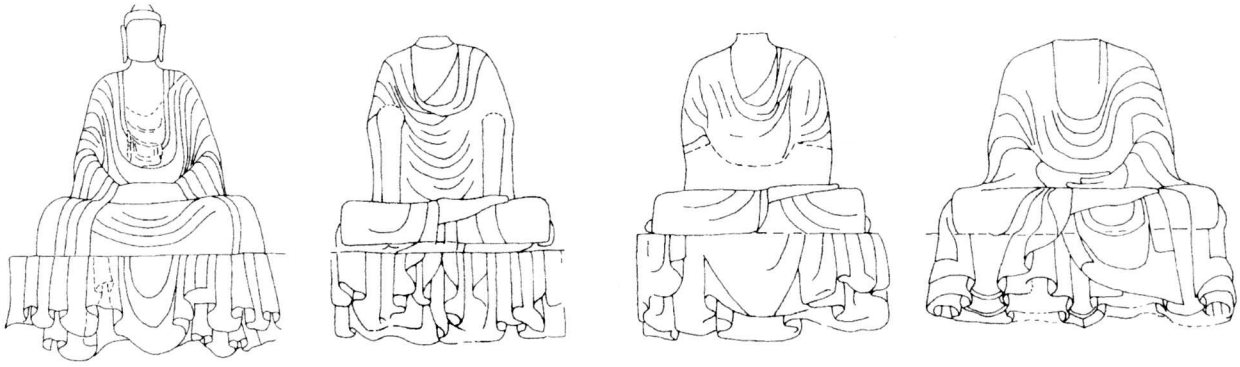
(53) 註26b文献巻十六、周京師天宝寺釈僧瑋伝、五五八頁a～五五八頁b。

(54) a. 唐長孺「論南朝文学的北伝」(『唐長孺社会文化史論叢』武漢大学出版社、二〇〇一年)二一一頁。

b. 曹道衡『南朝文学与北朝文学研究』(江蘇古籍出版社、一九九八年)二五七頁。

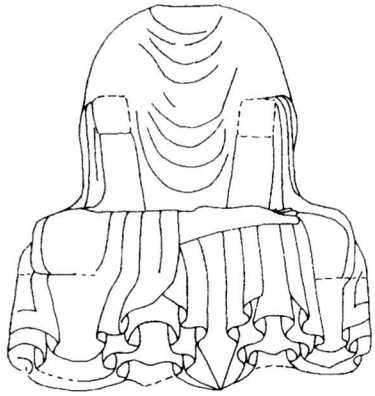
陳悦新(ちん・えつしん)
一九八五年　北京大学考古系本科卒業
一九八七年　北京大学考古系碩士研究生修了
二〇〇四年　北京大学考古文博学院博士研究生修了
現在　北京理工大学設計芸術学院文化遺産系副教授

田林啓(たばやし・けい)
二〇〇八年　神戸大学大学院文学研究科修士課程修了
現在　神戸大学大学院博士後期課程在籍、日本学術振興会特別研究員(DC1)

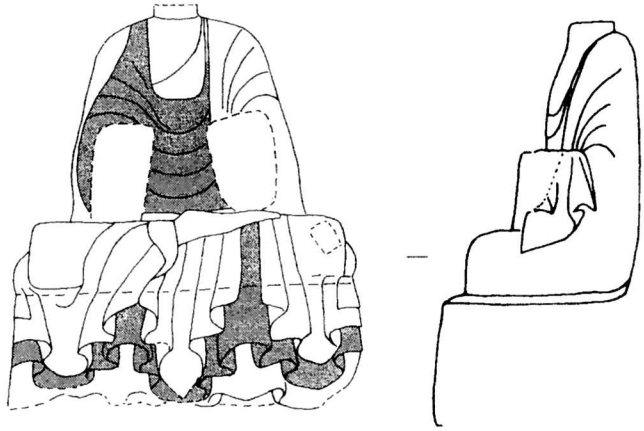


1　　2　　3　　4

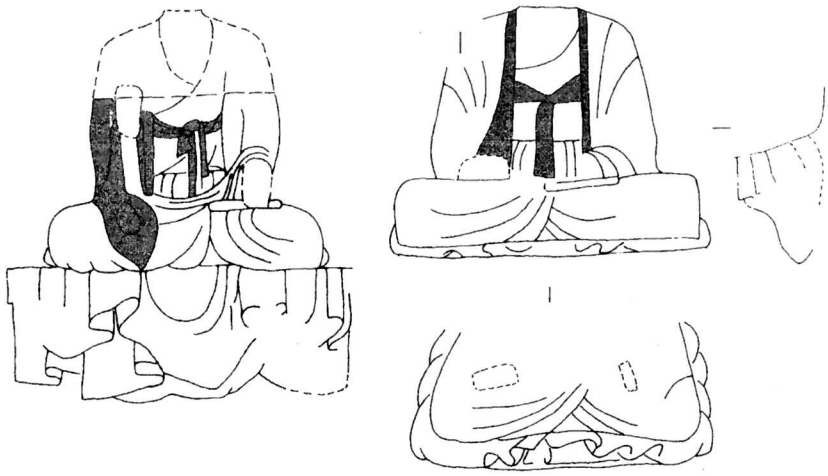
図一　棲霞山石窟露胸通肩式着衣
1、第 19 窟正壁如来坐像（点線は後補部分或いは損壊部分、以下同様）
2、第 22 窟正壁如来坐像
3、第 24 窟左壁如来坐像
4、第 18 窟正壁左側如来坐像



図二　棲霞山第 26 窟正壁如来坐像通肩式着衣

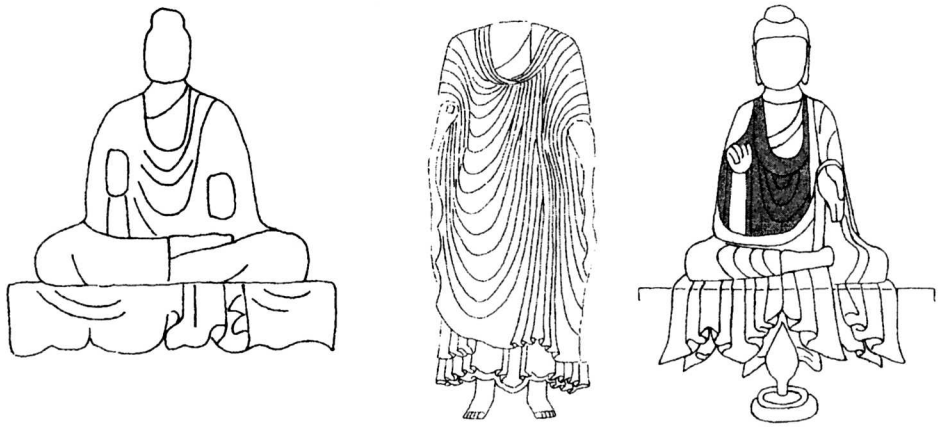


図三　棲霞山第 24 窟正壁如来坐像上衣搭肘式着衣正面及び左側面（着色部分は中衣）



1　　2

図四　棲霞山中衣搭肘式如来像着衣（着色部分は中衣）
1、第 18 窟正壁右側如来坐像
2、第 28 窟正壁如来坐像正面及び左側面及び脚部の俯瞰図

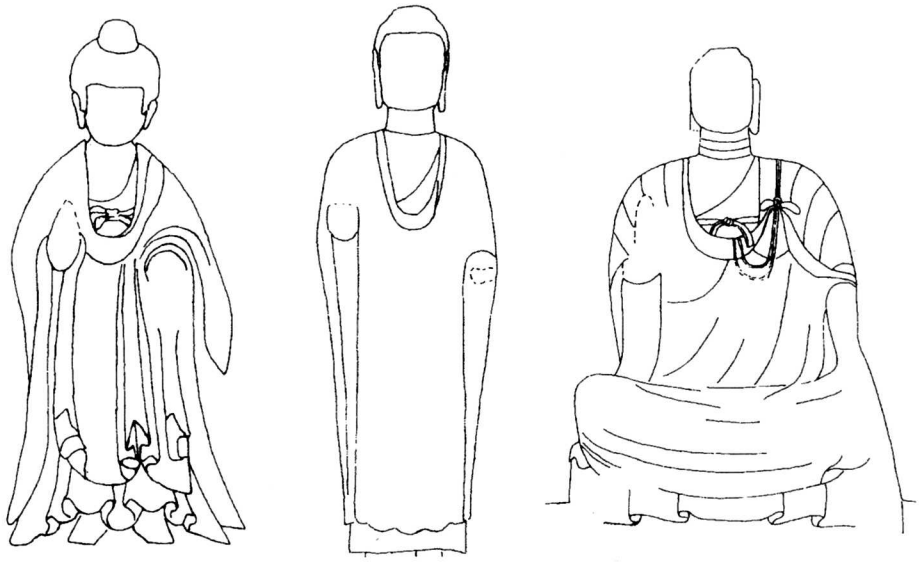


1　　2　　3

図五　浙江及び四川の如来像着衣（着色部分は中衣）
1、浙江千仏院小岩洞正壁中間龕如来坐像　浙江省新昌県
2、成都万仏寺中大通元年（529）如来立像　四川省博物院所蔵
3、中大同元年（546）慧影造像　上海博物館所蔵

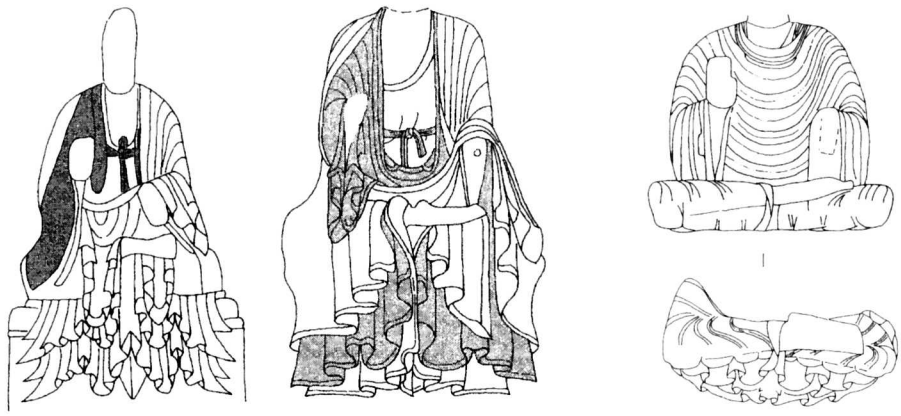
1　　2　　3

図六　江蘇及び浙江、甘粛の如来像着衣
1、江蘇金壇貼塑如来像　江蘇省鎮江博物館所蔵
2、杭州西晋元康八年（298）貼塑如来像　浙江省博物館所蔵
3、炳霊寺石窟第169窟西秦建弘元年（420）如来坐像　甘粛省臨夏回族自治州



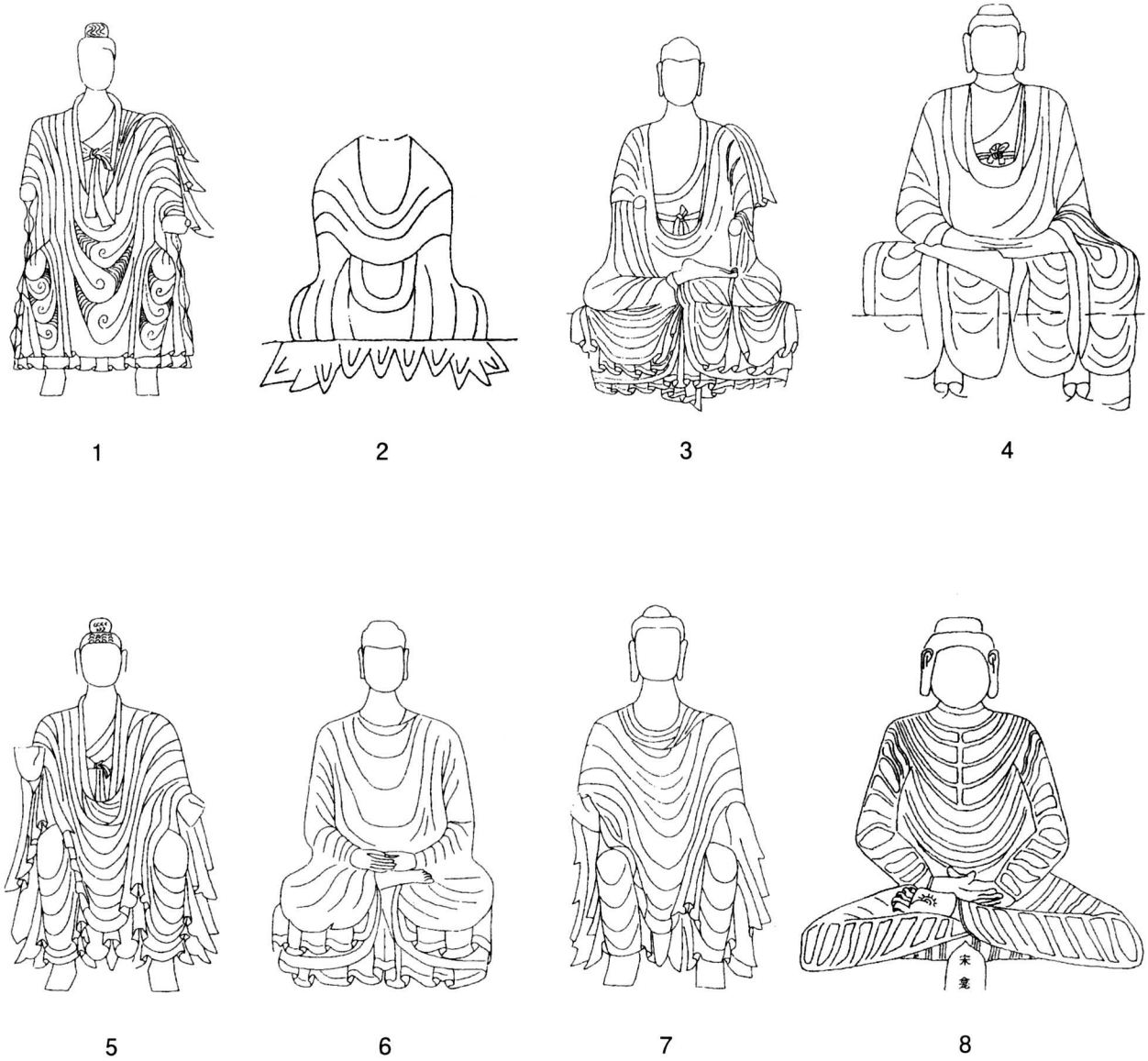
1　　2　　3

図七　山東の如来像着衣
1、龍興寺賈淑姿永安三年（530）如来立像　青州市博物館所蔵
2、龍興寺北斉如来立像　青州市博物館所蔵
3、雲門山石窟第1龕正壁如来坐像　山東省青州市



1　　2　　3

図八　山西と河北の仏衣（着色部分は中衣）
1、雲岡石窟第5－11窟右壁如来坐像　山西省大同市
2、天龍山石窟第3窟正壁如来坐像　山西省太原市
3、北響堂山石窟中洞正壁如来坐像正面及び脚部俯瞰図　河北省邯鄲市



図九　甘粛と寧夏の如来像着衣

1、莫高窟第 285 窟正壁如来坐像　甘粛省敦煌市
2、須弥山石窟第 32 窟中心柱後壁如来坐像　寧夏回族自治区固原市
3、麦積山石窟第 141 窟正壁如来坐像　甘粛省天水市
4、須弥山石窟第 51 窟正壁右側如来坐像　寧夏回族自治区固原市
5、莫高窟第 438 窟正壁如来坐像　甘粛省敦煌市
6、麦積山石窟第 62 窟左壁如来坐像　甘粛省天水市
7、莫高窟第 290 窟中心柱左面如来坐像　甘粛省敦煌市
8、武山拉稍寺北周明帝三年（559）如来坐像　甘粛省天水市

論文要旨（中文）

栖霞山石窟南朝洞窟约始凿于五世纪末期。南齐时期流行露胸通肩式佛衣，出现上衣搭肘式佛衣；齐梁之际延续露胸通肩式佛衣，出现通肩式和中衣搭肘式佛衣；萧梁时期以中衣搭肘式佛衣为主。栖霞山露胸通肩式和通肩式佛衣可能与东吴至西晋时期长江下游地区随葬品上贴饰的佛像服饰有关，上衣搭肘式佛衣的源头可能寻向前后秦时期的长安地区。大约自北魏迁都洛阳至隋建立这段较长时期中，栖霞山南朝佛衣类型流行于北朝域内，其中，露胸通肩式佛衣主要在青徐地区，中衣搭肘式、上衣搭肘式、通肩式佛衣主要在晋冀地区，露胸通肩式和通肩式佛衣在甘宁地区。

論文要旨（日文）

棲霞山石窟南朝窟の開鑿はおよそ五世紀末に始められた。ここの如来像において、南斉時期には胸元をU字形に開いた通肩の形式（露胸通肩式）が流行し、また右腕側の上衣の末端を左腕側にもっていき左肘に掛けるもの（上衣搭肘式）が出現した。斉梁の移行期にも露胸通肩式が行なわれ、また通肩式（胸元を開けない）と中衣を肘に掛けるもの（中衣搭肘式）も現れるようになる。梁代では中衣搭肘式が主流となる。棲霞山の露胸通肩式と通肩式の着衣法は、恐らく三国・呉から西晋に至る時期の長江下流域の副葬品（神亭壺）に貼られる如来像の服飾と関係があると思われ、上衣搭肘式の淵源は前秦・後秦時期の長安地区に求められる可能性がある。北魏の洛陽遷都から隋の中国統一に至る比較的長い時期に、棲霞山南朝窟の如来像着衣形式は北朝の統治地域内で流行し、その中でも露胸通肩式は主に青徐地域（現山東省）において、中衣搭肘式や上衣搭肘式、或いは通肩式は主に晋冀地域（現山西省、河北省）において、露胸通肩式と通肩式は主に甘寧地域（現甘粛省、寧夏自治区）でそれぞれ流行したと考えられる。

Abstract:

The Qixiashan Caves in South Dynasty was firstly cut at end of the 5th century. In the period of Southern Qi, the type of Buddha dress which reveals chest but covers both shoulders [*type I*] was popular one. A type of the dress which the third piece rests upon the left elbow [*type III*] was also available. Between Qi and Liang Dynasty the *type I* was continued to use while the two types of Buddha dress covering mode [*type II*] and the second piece rests upon the right elbow [*type IV*] can be seen. During Liang Dynasty the *type IV* was a major one. The *type I* and *type II* in Qixiashan Caves may have a relationship with the decoration of Buddha dress pasted on burial utensils of East Wu and West Jin Dynasty, which had been excavated from the areas of the lower reaches of Changjiang River. The origin of *type III* was back traced to the area of Chang'an City in the Former and Later Qin Dynasty. Perhaps in the long period when North Wei capital was moved to Luoyang and Sui Dynasty was approved, the types of Buddha dress in Qixiashan Caves was popular in the territory of North Dynasty. Of which *type I* spread Qing Zhou area, *Type IV*, *III* and *II* was popular in Shanxi and Hebei, *Type I* and *II* was mainly seen in Gansu and Ningxia.